

Title	日本のベンチャーキャピタル・ファンドが収益性を上げるために - 成功モデルの分析 -
Sub Title	
Author	長井一悟(Nagai, Kazunori) 奥村昭博
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2001
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2001年度経営学 第1702号 不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002001-1702

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	奥村 研究会	学籍番号	80028596	氏名	長井 一悟
<p>(論文題名) 日本のベンチャーキャピタル・ファンドが収益性を上げるために －成功モデルの分析－</p>					
<p>(内容の要旨)</p> <p>2001年5月28日付の日本経済新聞朝刊に、日本のベンチャーキャピタル・ファンドの収益率は米国の4分の1であるという記事が載った。これは由々しき事態である。なぜ、このような状況になっているのか、強い関心を抱いたのがこの研究の出発点である。</p> <p>事例研究では、日本のベンチャーキャピタルの歴史的背景、及び事業の現状を踏まえ、どこをどうすれば日本のベンチャーキャピタルが成功できるのか解き明かすことを目的としている。</p> <p>なお事例研究は、実際にベンチャーキャピタルから出資を受けているベンチャー企業、および将来的にベンチャーキャピタルからの出資受け入れを考えている企業を対象に、インタビューを実施して行う。また対象企業は、シードステージからレイターステージ、あるいはIPOを終えた企業までまんべんなく研究する。</p> <p>結論としては、スキル面では、サラリーマンではなくプロフェッショナルとして、経営者から見て信頼に値する能力を持っていることが必要である。また姿勢面では、これまたサラリーマンではなくひとりの人間として、興味を持ち、愛情を注ぎ、自らをかけられることである。このスキル面および姿勢面の特性が、ベンチャーキャピタリストのクレディビリティにつながってくるものと思われる。</p> <p>つまるところ、サラリーマン的なベンチャーキャピタリストは経営者側から資金面でしか期待されておらず、ゆえにプロフェッショナルとしての資質を磨くこともしない、そのためますます経営者からは当てにされない、という鶏と卵の関係が出来上がっているということである。ベンチャーキャピタリストとベンチャー経営者との間に、高い次元での信頼関係を築くためには、この鶏と卵の関係をどこかで断ち切らなければならない。どちらの側から断ち切るかといえば、やはりベンチャーキャピタリストの側だろう。すなわちサラリーマン根性を捨てることである。</p> <p>とはいえ、それが会社員のままでは到底難しいことは間違いない。相手は自らの人生までもかけて事業に取り組む経営者である。その経営者に対峙して信頼関係を取り結ぶのであれば、ベンチャーキャピタリスト側にも相応の覚悟、自ら独立して会社を興すくらいの覚悟が必要とされるだろう。その覚悟こそが、今回のインタビューでしばしば出てきた姿勢面の話である。「愛」にまでそれが行き着けば、自ずからベンチャーキャピタリストとしての成功がみえるに違いない。</p>					